The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カナダ極北地域における食糧の安全保障について：ヌナヴィク・イヌイット社会を事例として
Author(s)	岸上, 伸啓
Citation	GLOCOLブックレット. 2010, 3, p. 43-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/48269
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カナダ極北地域における食糧の安全保障について
ヌナヴィク・イヌイット社会を事例として

岸上 伸啓 国立民族学博物館先端人類科学研究部教授

1．はじめに

貧困問題や食糧の不足は、発展途上国特有の問題とみなされる傾向にあるが、現実にはそれ以外の国々にも存在している。その一例が、米国やカナダ、オーストラリアなどの先進諸国の中に取り込まれ、各国の周辺地域に存在しているさまざまな先住民社会の食糧問題である。

先住民とは、その土地の先住者でありながら、後から来た欧米人やそのほかの人びとによって作られた国家の中で、現在、政治経済的な少数者として被支配的な立場に甘んじている人びとである。彼らは国民国家の中で、独自のアイデンティティや文化を保持しているため、主流社会から明確に区別されている。北アメリカにはさまざまな先住民のグループが存在している。その中で極北地域に住んでいる民族のひとつがイヌイットと呼ばれる人びとである。

かつてイヌイットは、季節に応じて分布が変わる動物を捕獲するハンターであり、不猟による食糧不足は恒常的な問題であった。彼らは個人や家族レベルでの食糧不足を補うための社会制度や社会関係を作り上げ、過酷な自然環境の中で生き延びてきた。国民として国家によって保護されている現在でも、彼らはさまざまな理由から食糧不足に陥ることがある。ここではカナダ極北地域の現代のイヌイット社会を事例として、食糧に係る問題を紹介し、食糧の安全保障の点から検討する。

2．食糧の安全保障とイヌイット社会

食糧の安全保障は、1974年の世界食糧会議で初めて検討され

た。当時、その概念は、(1)食糧の消費拡大の支援、(2)食糧生産の変動と価格の調整、(3)つねに基本的な食糧品を確保できる状態を意味していた。しかし、アマルティア・センの飢餓と市場に関する研究の影響を受けて、食糧の供給よりも需要の方に力点が置かれはじめた。1983年の食糧農業機構(FAO)の提言では、食糧の安全保障とは、すべての人々が、いかなるときでも必要となる基本的な食糧品を入手できることを意味するようになった(ポチエ 2003: 21-22)。その後も議論が続けられ、1996年の世界食糧サミットのローマ宣言では、「フード・セキュリティとは、すべての人々が、つねに、元気で健康な生活を営むために、食事の必要性と食の好みを満たし、満足な量があり、安全で、栄養のある食糧に対して、物理的かつ経済的なアクセスをもつこと」と定義された(World Food Summit 1996)。食糧の確保は人間の生存の条件の中で不可欠なもののひとつであるが、イヌイット社会では食糧を獲得(生産)すること、分配・流通すること、食べることや料理することはさまざまな社会関係、信仰・世界観、価値観と深く関わっており、単に生存に必要なカロリー摂取を意味しているわけではない(岸上 2008; 2009)。

カナダ・イヌイット社会では、近年、さまざまな食糧問題に直面してきた。第一は、最近の生業離れや食の嗜好の変化により、若者を中心に外部から輸入されてくる加工食品に依存するようになったことである。この食生活の変化は、肥満症や高血圧、脳卒中、がん、虫歯など健康被害の増大をもたらした(岸上 2005: 147-149, 155)。これについては、地元産の動植物を食べるように医療関係者はイヌイットに呼び掛けている。第二は、PCBや水銀など有害物による環境汚染に起因する食糧の安全性の問題である(岸上 2002; 2005)。1970年代よりアザラシやホッキョクグマの体脂肪からPCBなどが検出されていたが、1980年代にはイヌイットの母乳からも同様な残留性有機汚染物質がかなりの濃度で発見された。これらの汚染物質は、おもに気流や海流、河川を通して極北地域に運ばれ、それが食物連鎖を通して人間やホッキョクグマの体中に蓄積されるようになった。これらの汚染物質は人間をはじめとする動物に生殖障害や精神障害、免疫力の低下などをもたらすため、大きな問題となった。第三は、1990年代以降に顕在化した地球の温暖化が、イヌイットの生業活動に悪い影響を及ぼし、捕獲量が低下し、ハンターによる食糧の安定的な供給が難しくなったことである(Hovelsrud, McKenna and Hantington 2008)。この状況は現在でも続いている。

これらが極北地域のイヌイットの食をめぐる大きな問題であり、食糧の安全保障はカナダ・イヌイット社会においても緊要な課題である(Chabot 2008; Duhaime and Bernard eds. 2008)。以下では、いくつかの問題の中から食糧の確保に関する問題に限定して、紹介し、検討を加えたい。

3．現代のイヌイット社会

カナダ・イヌイットの大半は、1920年代よりホッキョクギツネの毛皮交易に深くかかわり、ハドソン湾会社などの毛皮交易会社や毛皮商人を通してライフルやナイフ、やかん、鉄鍋、鉄針、布地など欧米製品をより恒常的に入手するようになった。これによって彼らの狩猟・漁労における生産効率は向上したが、社会外部で生産された生活物資に依存するようになった。

第二次世界大戦が終わり、極北地域における軍事戦略的な重要性が増し、国家主権が問題になり始めると、カナダ政府は極北地域の領有権を主張するためにそこに住むイヌイットを定住村落に集住させ、福祉サービスを提供するとともに英語習得を核とする初等教育を実施し、主流社会への同化を強力に推進した。この定住化政策や教育の実施は、季節移動と狩猟・漁労活動に基盤をおくイヌイット文化に大きな影響を与え、狩猟・漁労活動は衰退の一途をたどった。そして以前にまして外部の市場経済の影響を強く受けるようになった。

1960年代には米国における公民権運動の影響により、カナダでは先住民運動が盛んになった。そして1973年のニスガー判決の結果、カナダ政府は同化政策を転換し、先住民族と政治交渉を行うことになった。カナダ・イヌイットは、1975年に「ジェームズ湾および北ケベック協定」、1984年に「西部極北(イヌヴィアルイット)協定」、1993年に「ヌナヴト協定」、2005年に「ラブラドル協定」をカナダ政府等と締結し、土地権や生業権、言語権、教育権や補償金などを獲得し、政治的に自律の道を歩み始めた。

ここでは、ケベック州北部のヌナヴィク地域のアクリヴィク村の経済活動の現状について紹介する。

現在のアクリヴィク村が形成され始めてから約40年がたった。

その間に人口は、ほかの極北地域の村と同様に急激に増加し、1973年に9人であった人口は、2010年には約500人となった。この間に、村の体制もカティヴィク地方政府の下位単位の行政村としてカナダ国ケベック州に組み込まれるとともに、住宅、道路、飛行場、公共施設など下部構造の整備が進み、近代的な村へと変貌していった。村の運営や下部構造の整備は、ケベック州の予算と「ジェームズ湾および北ケベック協定」などに由来する村外からの資金が使用されている。さらに、イヌイットの個人レベルの収入も、賃金労働に従事しているにせよ（村人の全収入の約70パーセント）、福祉金など公的援助に依存しているにせよ（村人の全収入の約30パーセント）、そのもとはカナダ連邦政府かケベック州政府であるといえる。

ヌナヴィク地域の各世帯の生活に必要な物資のほぼすべて、さらに食糧の50パーセント以上は、週1便の貨物の空輸か年1回の輸送船によって村の外から運び込まれている。ヌナヴィク地域の3村で世帯経済の調査を実施したシャボーは、1995年当時、ヌナヴィクの人々が食べている食糧の85パーセント余りが、村の生協や小売店で購入されたものであり、各世帯は1ヶ月平均で1,000カナダ・ドルを食品の購買のために使用していると報告している（Chabot 2001）。この指摘は、アクリヴィク村のイヌイットにもほぼあてはまる。また、地元で野生動物を捕獲するためには、船外機付きカヌーやスノーモービル、ライフルと弾丸、漁網、ガソリンなどを現金で購入しなければならない。このように現在のイヌイットの生活にとって現金収入は必要条件のひとつになっている。

現在のアクリヴィク村の経済は、貨幣経済を基盤としつつも生業経済と混交しつつ、経済システムを形成しているのが特徴である。

かつては賃金労働を基本とする定職に就こうとするイヌイットの数も、実際に長期間にわたり定職に就いているイヌイットの数も少なかったが、現在では、男女を問わずほぼすべてのイヌイットが村の中で定職に就くことを望んでいる。

1980年代半ばに、アクリヴィク村の中で1年以上にわたって賃金労働の定職に従事していたのは、生協のマネージャーと滑石彫刻購入担当係各1人、小中学校の用務員2人、小中学校のイヌイット語の教師1人、イヌイット航空のエージェント兼郵便局員1人、看護所の通訳1人、発電所員1人、村役場の配水係やし尿処理係から約5人の計13人程度であった。生協や村役場には定職や臨時職があるほかに、夏から秋にかけては、家屋建築や道路工事など3ヶ月間の季節的な労働雇用があった。当時のイヌイットの成人男性は、週5日間毎日8時間拘束される職に就くと、好きな時に狩猟や漁労、キャンプに行くことができないといって、長期間同じ仕事に従事することはなかった。イヌイットは定職に就いて恒常的に現金を獲得することよりも、自由に狩猟・漁労活動に従事することを好む傾向にあった。彼らは3ヶ月間から6ヶ月間賃金労働に就いた後にやめ、3ヶ月間から6ヶ月間を失業手当に頼るという就業パターンを繰り返していた。これは失業手当を利用して、狩猟・漁労活動を行うというイヌイットによる経済戦略のひとつであった。

アクリヴィク村をはじめとする極北の村には、就労可能な人口に比べて定職の数が絶対的に不足している。したがって、村役場の担当者は村関係の季節労働や臨時の仕事がある場合には、すべての世帯に仕事がいきわたるように配慮しながら、雇用をしていた。定職を好まないとはいえ、村の中での生活や狩猟・漁労を行うためには、現金が必要である。賃金労働の定職に就かないイヌイットは、高齢年金、家族扶養手当、福祉金、失業手当など政府支出の現金や、滑石彫刻の制作・販売で得た収入を利用し、家賃や電話代を支払ったり、生活用品や狩猟・漁労に必要な物資を購入していた。1983年以前は、アザラシやホッキョクギツネの毛皮の販売も重要な収入源であった。

1996年当時、アクリヴィク村でイヌイットが就くことができる実際の職の数は、約45余りで、村全体の世帯数約90世帯（うち15は1人世帯）よりはるかに少ない。

フルタイムの職とパートタイムの職を合わせれば130人余りの人が何らかの形で現金収入を得ていた。アクリヴィク村の成人の平均年収は約16,500カナダ・ドル（ケベック州全体は約23,200カナダ・ドル）であった。夫婦合わせての年収の平均は、38,500ドル（ケベック州全体は約53,200カナダ・ドル）であった。極北地域では、現金収入が少ない一方で、物価がカナダ南部と比べ1.5倍ほど高いため、生活は決して楽ではない（表1参照）。イヌイットはそうした厳しい現金収入の一部を狩猟・漁労活動や加工食品の購入のために使用している。

1980年代半ばと1996年を比べればわかるように、賃金を得る

表1　ヌナヴィク地域とケベック市における食品価格の比較
（Duhaime, *et al*. 2000: 10）

	ヌナヴィク地域	ケベック市
牛肉（1キログラム）	7.95カナダ・ドル	5.52カナダ・ドル
リンゴ（1キログラム）	2.84カナダ・ドル	2.40カナダ・ドル
ジャガイモ（1キログラム）	7.18カナダ・ドル	3.17カナダ・ドル
バター（454グラム）	4.34カナダ・ドル	3.17カナダ・ドル
鶏卵（12個）	3.11カナダ・ドル	1.78カナダ・ドル
ミルク（1リットル）	2.72カナダ・ドル	1.38カナダ・ドル
食パン（675グラム）	1.99カナダ・ドル	1.46カナダ・ドル

ことができるフルタイムの職やパートタイムの職の数は、増加した。ヌナヴィク地域では雇用の62パーセント以上が村役場や学校などパブリック・セクターであり、カナダ政府やケベック州政府の経済分野での役割が大きいといえる（Duhaime 1999; Chabot 2003）。1990年代以降は、より多くの村人が月曜日から金曜日まで村内で働き、週末か1日の仕事が終わってから狩猟・漁労に行くようになった。このためウィークデーに狩猟や漁労に従事するのは老人や無職の者のみとなった。村人の経済戦略もできるだけ現金を稼ぐことができるフルタイムの職に長期間就くことへと変化した。このような傾向は現在でも認められる。

1980年代以降におけるヌナヴィク・イヌイットの生業活動には、（1）アザラシやホッキョクギツネの毛皮の価格の低迷、（2）定職に就くことによる生業活動の時間的な制限、（3）狩猟・漁労経費の高騰などの負の要因が存在した。現在の生業活動は、現金収入で購入したライフルやガソリン、スノーモービル、船外機付きカヌーを利用して行われるという意味で、貨幣経済の上に成り立っている活動である。

生業活動は商業目的ではないので経済収支の点から見ると金銭的な利益を生み出すことはない。しかし、イヌイットは狩猟や漁労などの生業活動を行うことによって、カリブーやホッキョクイワナなど好みの伝統的な食糧を入手することができるし、生業活動に従事することやツンドラの大地や海氷上で過ごすことで、文化的かつ精神的な満足を得ることができるのである。

1970年代半ばから現在までアクリヴィク村の生業活動の年周期は基本的には大きく変化していない。夏季はホッキョクイワナ漁とアザラシ猟、秋季はセイウチ猟、シロイルカ猟、アザラシ猟、カリブー猟、冬季はカリブー猟や湖上での漁労、春季から夏季にかけてはアザラシ猟や鳥猟がおもに行われている。そして彼らの狩猟・漁労は、スノーモービルや船外機付きカヌーを利用した村からの日帰りの活動を基本としている。現在でも、アクリヴィク村においては狩猟や漁労によって捕獲されるカリブーやアザラシ、ホッキョクイワナ、鳥類は重要な食糧である。

近年は、地球温暖化の影響で気象状況が予測不可能なまでに不安定になっており、イヌイットの狩猟活動に大きな影響が出ている。とくに海域の凍結が遅くなり、海氷原が溶け出す時期が早まっており、冬季と春季の狩猟活動が低迷している。

以上の事例から分かるように、（1）物価が高いにもかかわらず現金収入源が限られており、購買力に限界があることや（2）地球温暖化の影響による狩猟活動の低迷がイヌイットの食糧獲得を脅かす大きな問題となっている。

4. 食糧の確保と食物分配の実践

現在、イヌイットが食糧を獲得するおもな方法は、（1）みずからもしくは世帯内のハンターが獲物を捕獲すること、（2）食糧をもらうこと、（3）食糧を現金で購入することである。すでに述べたように、（1）と（3）に問題があるときには、（2）の方法が重要な食糧確保の鍵となる。

もともとイヌイット社会では、厳しい自然環境のもとで狩猟活動に依存していたので、食糧確保が不安定であった。それゆえに食糧難の時に集団が生き残るためのいくつかの工夫が制度化されていた。そのひとつが、食物分配であり、現在でも実践されている（岸上 2007）。

現在のアクリヴィク村の食物分配は、狩猟に参加したハンター間での第一次分配、村やキャンプに帰ってきたハンターと村人やキャンプのメンバーとの第二次分配、村にもたらされた肉が食事を通して分配されたり、村人の間で分配されたりする第三次分配からなる。分配の対象となるものは、地元でとれる陸獣や海獣の肉や魚類、現金で購入した食糧品などである。

第一次分配は、狩猟に参加したハンターによって行われる。獲物を仕留めたハンターは、獣皮やもっとも多くの量の肉を取ることが許されるが、残りは狩猟に参加したハンターに分配される。

写真1　ハンターによるアザラシの分配（1999年撮影、アクリヴィク村の近く）

獲物の一部や食物をほかの者に与えることは、現地では「ニッキミク アイツイユク」（*niqimik aituijuk*「肉もしくは食物を与える」）と表現され、獲物や食物を受け取ることは「ニンギクツク」（*ningiktuk*「獲物の一部を手に入れる」）と表現される。多くの場合、獲物の解体に参加したハンターたちは捕獲量全体を考慮しながら、自分が欲しい分を取ることが多い。かつてはシロイルカやセイウチなどの大型獣を仕留めた場合、捕獲したハンターがどの部分を取るかは決められていたが、現在では、そのような厳格なルールは存在していない。

第二次分配では、肉をもたらしたハンターが彼の近親族（両親や祖父母、兄弟姉妹、オジ、オバ、子供）に全部もしくは部分を与えることが多い。近親族以外にも、近所の友人、古老、病弱で狩猟に行けない人、同名者（*sauniq*）、儀礼的助産人（*sanaji*）に肉を分け与えることがある。ある人間が、ほかの人の家やテントに獲物や食物を持っていってあげる行為は、「パユツク」（*pajutuk*「同じキャンプや村の中の別の家に住む人にプレゼントを持っていく」）と表現される。さらに、これらの人々の中で、肉が必要な人は直接、ハンターの家に肉をもらいにいく場合がある。また、親戚や近所のハンターが肉を持っていない場合には、村のFMラジオ放送局に電話をかけ、肉を無償で提供してくれる人を探すことや、「ハンター・サポート・プログラム」のもとで村の冷凍庫に貯蔵している肉や魚を必要に応じてもらうことがある。肉や魚などに関して、1対1の対面的関係で「貸し借り」を行うことは非常にまれであり、ほとんどが与えるという形をとる。セイウチやシロイルカなど大型獣を仕留めたハンターは、村に帰ると村人全員に肉やマッタック（シロイルカの脂肪付き皮部）を少量ずつ、分配することがある。

別の形態の第二次分配が存在している。村有の大型ボートや個人所有の大型ボートを利用し、捕獲したセイウチの肉やシロイルカのマッタックなどが村人に分配されている。村有ボートを利用した場合には、村に雇われたハンターが村に持ち帰った肉やマッタックを村の役人がそれらを必要とする全世帯に平等に分配する（岸上 2001: 37-38）。個人所有のボートの場合には、私有大型ボートの船長とそれに同乗したハンターが自分たちの肉やマッタックを取った後、残った肉やマッタックをもらいにきた村人に船長が手渡しをする（岸上 2001: 40-41）。前者も後者も、村人に食糧をもたらすという意味で、現地では「パユツク」と表現される。

第三次分配としては、第二次分配で手に入れられた肉が食事を通してさらに親族やほかの村人へと分配されることがある。食事に招待することや食事に参加することによって食物が分配される。誰かを食事に招待することは、「カイクイユク」（*qaiqujijuk*「誰かを食事にくるようにと招待する」）と表現される。アクリヴィク村のイヌイットは祖父母や父母が存命の場合には、自宅ではなく祖父母や父母の家で昼食や夕食をとることが多い。また、クリスマスやイースターの時には、村が主催する村全体での祝宴が実施され、食事が村人に振る舞われる。このように人々が集まって食事を共にとることは、「ニリマツット」（*nirimatut*「一緒に食べる」）と表現される。

このようにイヌイットの間には、食糧を確保するさまざま食物分配のやり方が存在しているが、ハンター・サポート・プログラム以外の食物分配は、おもに拡大家族関係にある人びとのあいだや狩猟パートナー間で行われることが多い。このため、村内に多数の家族や親族を持たない人びとにとっては、通常の食物分配という制度は有効に働くとは限らない。これに対し、ヌナヴィク地域においてはイヌイットであるならば享受できる食物分配にハンター・サポート・プログラムを活用した制度がある。私は、この制度が食糧確保の不安定な現代のイヌイット社会にとって非常に重要な役割を果たすと考えている。

5. ヌナヴィク地域におけるハンター・サポート・プログラム

1970年代初頭には、ホッキョクギツネやアザラシの毛皮の価格が低迷したために、イヌイットはそれらの毛皮を売って現金を入手し、その現金を利用して狩猟・漁労活動を続けていくことが困難になりつつあった。しかし、当時のイヌイットは、狩猟・漁労活動を、さらにはそれに基づく生活を保持し続けたいと希望していた。このため、1975年に締結された「ジェームズ湾および北ケベック協定」において生業活動を促進するような経済プログラムの創出が提案された。このハンター・サポート・プログラムの創設目的は、生活様式として崩壊の危機に瀕したイヌイットの狩猟や漁労、ワナ猟など生業活動を促進し、永続化させ、かつそのような活動から得ることのできる産物をイヌイットに供給することを保障することであった。

1980年から1982年にかけては暫定的な経済プログラムが実施されたが、1982年12月にイヌイットの生業活動を促進するためのハンター・サポート・プログラムが「法律83」としてケベック州議会で可決され立法化された。イヌイット側から強い要望があり、そのプログラムの実際の運用はそれぞれの村に任されることになったため、村が希望すれば、村用の大型狩猟ボート（コミュニティー・ボート）や村人のために食糧を冷凍保存するための大型冷凍庫を購入することや、隣村から肉や魚を購入し、それらを村人に無料で提供することなどが可能になった。

ハンター・サポート・プログラムの予算は、ケベック州政府からその自治体のひとつであるカティヴィク地方政府に支出される。この予算は、インフレ率やイヌイットの人口増加などの可変要因に基づいて毎年修正や補正が加えられている。こうしてカティヴィク政府の管轄下にあるハンター・サポート・プログラムの全予算の15パーセントはカティヴィク政府の管理事務費として使用される。さらに残りの85パーセントのうちの15パーセントがカティヴィク地方政府によって地方全体のプロジェクトのために使用される。以上の予算を差し引いた残額が原則として各村に人口数に比例して配分される。しかしながら、各村とカティヴィク地方政府は毎年、村の計画や要望を加味しながら予算配分を調整するので、年によっては高額な予算配分を受けることがある。

表2　アクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムの年間支出
（出典：HSP Annual Report 1983-2002）

年	プログラムの支出額
1983年	約5万3,000カナダ・ドル
1984年	約32万6,000カナダ・ドル
1985年	約11万2,000カナダ・ドル
1986年	約9万カナダ・ドル
1987年	約10万8,000カナダ・ドル
1988年	約18万5,000カナダ・ドル
1989年	約11万5,000カナダ・ドル
1990年	約13万9,000カナダ・ドル
1991年	約14万2,000カナダ・ドル
1992年	約15万カナダ・ドル
1993年	約18万2,000カナダ・ドル
1994年	約13万5,000カナダ・ドル
1995年	約20万8,000カナダ・ドル
1996年	約51万3,000カナダ・ドル
1997年	約18万5,000カナダ・ドル
1998年	約16万カナダ・ドル
1999年	約16万1,000カナダ・ドル
2000年	約20万カナダ・ドル
2001年	約24万8,000カナダ・ドル
2002年	約20万7,000カナダ・ドル

ハンター・サポート・プログラムの具体的な実施内容は村ごとに管理され、運用されることになっている。プログラムの会計年は1月1日から同年の12月31日までであるが、このプログラムによるアクリヴィク村の年間支出額は、次の表2に示す通りである。

村議会がこの予算をどのように運用するかを決める。このため村ごとに独自のプログラムを作ることができる。

この表2によると、年間の最高支出額は1996年の51万3,000カナダ・ドルであり、年間の最少支出額は初年度を除けば、1986年の9万カナダ・ドルである。初年度から2002年までの年間平均支出額は、約18万カナダ・ドルである。1カナダ・ドルを90円と換算すると、アクリヴィク村は年平均1,620万円をハンター・サポート・プログラムの資金として使用していることになる。

アクリヴィク村では1984年からハンター・サポート・プログラムを利用してシロイルカ猟やセイウチ猟を実施し、獲物を村人に分配するようになった。さらに、村のハンター・サポート・プログラムの予算に余裕があれば、冬季に村のハンターからプログラムを利用して肉や魚を買い上げ、必要な村人に無償で分配することが行われてきた。アクリヴィク村において1999年に実施されたハンター・サポート・プログラムの運用を紹介する。

ハンター・サポート・プログラムの運用は、年を追うごとに新たな試みが追加されるとともに、ほかのプログラムと組み合わされて運用されるようになった。1999年のアクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムの支出内訳は、表3の通りである。

表3　1999年のアクリヴィク村のハンター・サポート・プログラムの支出の内訳
（出典：HSP Annual Report 1999）

狩猟・漁労・ワナ猟活動	約3万9,000カナダ・ドル
道具や設備	約3万1,000カナダ・ドル
狩猟地への航路や道路の整備	約8,000カナダ・ドル
救助・探索活動	約1万2,000カナダ・ドル
毛皮買い取り	約2,000カナダ・ドル
野生生物管理	約1万カナダ・ドル
狩猟者や漁労者のサービス	約2万4,000カナダ・ドル
伝統的活動への補助金	約1万4,000カナダ・ドル
管理費	約2万1,000カナダ・ドル
総計	約16万1,000カナダ・ドル

第一に、ハンター・サポート・プログラムを利用した狩猟遠征が実施された。セイウチ猟とシロイルカ猟は、村有の大型狩猟用ボートを利用して実施された。セイウチの狩猟場は、サルイット村の北方海上にあるサルスベリー島やノッチンガム島で、出猟期間は1週間以上であった。シロイルカの狩猟場は、イヴィヴィク村以北のハドソン海峡であり、出猟期間は約1週間であった。これらの狩猟の獲物は、村人に食糧として無償で平等に提供された。

第二に、冬から春にかけてハンター・サポート・プログラムの資金で村人からカリブー肉

写真２　ハンター・サポート・プログラムを利用したシロイルカの肉と脂皮の村全体での分配（1999年10月撮影、アクリヴィク村）

やホッキョクイワナを購入し、食糧を必要とする村人に無償で提供した。購入量が多かった場合には、村の全世帯に肉やホッキョクイワナを分配することがあった。また、同資金を利用してサルイット村から帆立貝を1,000カナダ・ドル分購入し、その貝を欲しい村人に無償で提供した。

第三に、狩猟・漁労活動を促進するために狩猟道具やその材料、狩猟関連機器をハンター・サポート・プログラムの資金で購入し、安価でハンターに販売するとともに、故障した無線通信機を修理した。1台1,500カナダ・ドルの無線通信機を5台、プログラムの資金で購入し、村のハンターにその70パーセントの価格で販売した。また、村人が所有する故障した無線通信機3台をプログラムの資金で修理した。また、1台4,000カナダ・ドルもする大型狩猟用ボートのレーダーを購入するための補助金を出した。1999年当時、アクリヴィク村には3隻の大型狩猟用ボートがあった。村用の大型狩猟用ボートには全額を、2隻の私有大型狩猟用ボートにはそれぞれ1,000カナダ・ドルの補助金を出した。これ以外にテント用のキャンバス布地、ソリを製作するための板、ゴム製長靴、漁網、無線機など狩猟・漁労活動で使用する道具やその材料をプログラムの資金で仕入れ、村人に仕入れ価格の70パーセントの値段で販売した。

写真３　ハンター・サポート・プログラムを利用したセイウチの肉の村全体での分配（2003年９月撮影、アクリヴィク村の近く）

第四に、ハンター・サポート・プログラムを利用して、船着場へのアクセスを容易にするための橋の建設、浅瀬の石を除去し船外機付きカヌーの運行を容易にするための作業、村の近くのイハルアツク湖までブルドーザーを利用して道をつくる作業を実施した。

第五に、狩猟中に遭難した人を捜索し、救助することや村のジュニア・レンジャー隊、若者の夏期狩猟・漁労訓練キャンプにプログラムから資金を提供した。

第六に、狩猟中に事故でスノーモービルをなくしたハンターや船外機を壊したハンターに、新しい道具を購入するための補助金を出している。これは1997年頃から始まった新規事業である。村役場がハンターの申請を承認すれば、道具を購入するために地域全体のハンター・サポート・プログラムから購入価格の3分の1が、村のハンター・サポート・プログラムからも、さらに3分の1が補助されることになっている。1999年には、アクリヴィク村のハンターから小型ボート3隻と船外機1台の購入補助申請があり、補助金が支給された。

第七に、1999年からアクリヴィク村では新たな試みが開始された。ハンター・サポート・プログラムの資金で、スノーモービルとソリを購入し、村の65歳以上の老人（約10人）が狩猟や漁労のために利用できるようにした。利用したい老人は、村役場に届けて、職員が調整したスケジュールにしたがって、無料で利用することができる。この貸借制度によって、収入が少なく、スノーモービルを所有していない村の老人もより頻繁に狩猟や漁労に行けるようになった。

第八に、アクリヴィク村では、ハンター・サポート・プログラムやそのほかの資金を利用して、伝統的な技術保存・振興プロジェクトを実施した。まず、カティヴィク地方政府とマキヴィクの経済開発基金を利用して村人から、毛皮を一定の価格で買い取った。たとえば、ホッキョクギツネの毛皮1枚は40から60カナダ・ドル、ワモンアザラシの毛皮1枚は30から50カナダ・ドルであった。

1980年代半ば以降、毛皮の買い取り価格が低迷していたため、イヌイットはアザラシやホッキョクギツネの毛皮をおもに自家用に利用するのみで、販売することはあまりなかった。このことは、毛皮が現金収入源にならないことを意味し、狩猟・漁労活動の低迷の原因のひとつであった。この状況を改善させるために、カティヴィク地方政府とマキヴィクはイヌイットから毛皮を買い取り、村人に

現金収入を提供するための経済開発基金を1998年頃に創設したのであった。なお、アクリヴィク村での毛皮の価格付けと買い取りは、村役場の職員が担当した。

第一と第二の事業は、ハンター・サポート・プログラムの資金を利用して、ハンターからカントリー・フードを購入し、村人に提供するというものである。1999年において獲物が購入された月は2月および3月、10月、12月で、日数にすると合計で15日であった。その総数は、カリブー31頭、セイウチ6頭、シロイルカ15頭、アザラシ肉約390キログラム、ホッキョクイワナ約4.5トンであった。カリブー31頭は、2,170人日分（5人×14日×31頭）に相当する。セイウチ1頭あたりの肉を500キログラム、シロイルカ1頭あたりのマッタックの量を50キログラム、その肉を200キログラムとして換算すると、セイウチの肉は約3トンに、シロイルカのマッタックは約750キログラム、その肉は約3トンに相当する。また、ホッキョクイワナ約4.5トンは約2,000匹に相当する。これらの肉や魚が、食糧を必要とする村人に提供されたことになる。

写真４　クージュアック村のコミュニティー・フリーザーの中（2005年２月撮影、クージュアック村）

ここで紹介した事例は、1999年のアクリヴィク村におけるハンター・サポート・プログラムの事例であるが、2010年現在、基本的におなじプログラムが実施されている。このプログラムは、村人の狩猟・漁労活動を振興させるとともに、村人にカントリー・フードを供給することを主目的としていた。最近では、ヌナヴィク地域のすべての村において村有冷凍庫に肉や魚を保存し、食糧を必要とする村人は、そこから必要な分だけを自由に入手できるような制度を、ハンター・サポート・プログラムを利用して実施している（Polak 2010）。このようにヌナヴィク地域の各村では、ハンター・サポート・プログラムの運用がイヌイットの食糧確保に貢献しているということができる。

5．結論

ここでは食糧の不足問題は、アフリカや中南米などの発展途上国だけの問題ではなく、第一世界の国家の中に存在している先住民社会においても発生していることを、カナダの極北地域に住むイヌイットを事例として紹介した。

現代のイヌイットにとって彼らの食糧の安全保障を脅かす問題は、（1）食糧となる動物の汚染、（2）食生活の変化による健康の悪化、（3）地球温暖化に起因する狩猟・漁労活動の低迷、（4）限られた現金収入に起因する購買力不足などである。言い換えれば、食糧の安全性、栄養価、入手の困難さである。本章では、この中から特にいかにして食糧資源を確保するかという問題を取り上げた。

イヌイット社会には、おもに家族・親族関係に基づいた食物分配という制度が存在し、機能してきた。現在でも、慣習的な食物分配は、拡大家族関係者間や狩猟パートナー間では有効に機能しているものの、非親族間ではその効果に限界がある。それを補うかたちでヌナヴィク・イヌイット社会において実践されているのが、ハンター・サポート・プログラムを活用した村レベルでの食物分配である。家族・親族関係というセイフティ・ネットワークがカバーできない範囲を、この制度はカバーでき、村人であれば食糧にアクセスできる。ただし、このプログラムの予算には限度があるため、常に村人に食糧を提供できるとは限らない。それでも特定の個人や家族の食糧危機を救う可能性がある。

このように、グローバル化の進む現代社会に生きるイヌイットは、既存の慣習や社会制度を利用するとともに、新たな制度を作りだし、運用しながら集団として食糧の確保問題に対処している。カナダ・イヌイット社会において食糧を確保するためには、（1）従来の狩猟・漁労活動を維持・振興させること、（2）現金収入を確保すること、（3）新旧の扶助制度を維持・活用させることが肝要であると考える。

グローバル化の進展とともに、1980年代より多数のイヌイットが都市に移住をはじめた。2006年の国勢調査によると、カナダ・イヌイットの総人口約5万人のうち15パーセント以上が、生まれ故郷の村々を離れ、オタワやエドモントン、モントリオールといった大都市に移住し、生活を営んでいるという。移住先で経済的に成功しているイヌイットもいるが、大半が失業者やホームレスである。都市に住む彼らには、家族関係や親族関係のセイフティ・ネットワークがほとんど存在していないので、食糧の確保が常に深刻な問題となっている（Kishigami 2008）。都市イヌイットの食糧の安全保障の問題は今後、ますます重要な課題となることを指摘し

ておきたい。

注　本章の事例の部分は、岸上(2007)の第5章に基づいていることをお断りしておく。

引用文献

岸上伸啓
2001　「カナダ・イヌイット社会における海洋資源の利用と管理：ヌナヴィクのシロイルカ資源の場合」『人文論究』70: 29-52。
2002　「カナダ極北地域における海洋資源の汚染問題」『国立民族学博物館研究報告』27(2): 237-281。
2005　「カナダ極北の先住民族イヌイット」岸上伸啓編『極北』(世界の食文化20)東京：農文協、pp.121-159。
2007　『カナダ・イヌイットの食文化と社会変化』京都：世界思想社。
2008　「文化人類学的生業論―極北地域の先住民による狩猟・漁撈採集活動を中心に」『国立民族学博物館研究報告』32(4): 529-578。
2009　「文化の安全保障の視点から見た先住民生存捕鯨に関する予備的考察―アメリカ合衆国アラスカ北西地域の事例から」『国立民族学博物館研究報告』33(4): 493-550。
ポチエ，ヨハン
2003　『食糧確保の人類学――フード・セキュリティ』山内彰・西川隆訳、東京：法政大学出版局。

Chabot, M.
2001　'De la production domestique au marché: l'économie comtemporaine des familles Inuit du Nunavik.' Unpublished Ph.D. Thesis, Department of Sociology, Université Laval.
2003　'Economic Changes, Household Strategies, and Social Relations of Contemporary Nunavik Inuit." *Polar Record* 39(208): 19-34.
2008　'Assessing Food Insecurity in the Arctic: An Analysis of Aboriginal Household Coping Strategies' In Duhaime, Gérald and Nick Bernard (eds.), *Arctic Food Security*. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute Press and Quebec City: CIÉRA, Université Laval. pp. 139-165.
Duhaime, G., P. Fréchette, and V. Robichaud
1999　*The Economic Structure of the Nunavik Region (Canada): Changes and Stability*. Quebec: GETIC, Université Laval.
Hovelsrud, G. K., M. Mckenna, and H. P. Huntington
2008　'Marine Mammal Harvests and Other Interactions with Humans,' *Ecological Applications* 18(2) Summlement: 135-147.
Duhaime, G. and N. Bernard (eds.)
2008　*Arctic Food Security*. Edmonton: Canadian Circumpolar Institute Press and Quebec City: CIÉRA, Université Laval.
Duhaime, G., *et. al*.
2000　*Nunavik Comparative Price Index*. Quebec: GETIC, Université Laval.
Kativik Regional Government
1983- 2002 *HSP Annual Report*. Kuujjuaq: Kativik regional Government.

Kishigami, N.
2008　'Homeless Inuit in Montreal.' *Études/Inuit/Studies* 32(1): 73-90.
Polak, M.
2010　'Sharing the Meat of the Arctic.' *Montreal Gazette* (January 10, 2010)
World Food Summit
1996　Rome Declaration on World Food Security. http://www.fao.org/docrep/003/w3613e/w3613e00.HTM（2009年12月20日）